

氏名	千田 寧子
ヨミガナ	チダ ヤスコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第360号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 東京音楽学校におけるオルガン演奏の変遷 ～近代日本におけるオルガン専門教育の成立過程を中心に～ 〈演奏〉 J.S.Bach: Passa caglia 他

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	廣江 理枝
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	塚原 康子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	大塚 直哉
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	大角 欣矢
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		廣野 嗣雄

（論文内容の要旨）

本研究は、「東京音楽学校におけるオルガン演奏の変遷」について、オルガンに関わる楽譜、楽器、教育の調査をもとに明らかにするものである。

日本の西洋音楽受容史において、東京音楽学校が果たした役割は大きい。これは、日本で唯一の官立音楽専門機関として日本の音楽家を多く輩出していることや、日本の西洋音楽の基盤となる初等・中等教育に携わる教員を養成したことからも明らかである。オルガンはその中で初期から科目に組み込まれ、「学校教育用楽器」としての需要の一方で、初期の段階から「専門楽器」としての取り組みが始まったが、オルガン演奏の実態はどのようなものだったのだろうか。

日本のオルガン黎明期における東京音楽学校内の動きを詳細に扱った先行研究がない中で、本研究では東京音楽学校におけるオルガン演奏の実態について「東京音楽学校で受入れた楽譜」「東京音楽学校で受入れた楽器」「東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師」「東京音楽学校におけるオルガンの課題」「東京音楽学校における演奏の記録」の観点から現在東京藝術大学に残されているオルガンに関する資料を可能な限り抽出し、明治期、大正期、昭和期の変遷を明らかにすることを試みた。

「東京音楽学校で受入れた楽譜」に関しては、現在東京藝術大学附属図書館に旧分類楽譜として所蔵されている楽譜の調査を行い、会計資料と照合して当時実際に使われていた楽譜の全貌を明らかにした。

「東京音楽学校で受入れた楽器」は、会計資料から受入時期や台数や現存する楽器の調査を行った。「東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師」は教務関係文書綴に含まれる「成績関係資料」と『東京音楽学校一覧』を調査し、オルガンを受持った教師のうち明治期の中心となった島崎赤太郎（1874-1933）、大正期に活躍した中田章（1886-1931）、昭和期の中心であった眞篠俊雄（1893-1979）についてまとめた。島崎赤太郎については、東京音楽学校の所蔵楽譜中に島崎のサインの入った楽譜が一定数あることが分かり、中田章についても蔵書が若干数現存することがご子孫のご協力によって明らかになった。眞篠俊雄に関しては、東京藝術大学音楽学部オルガン科研究室に保管されていた楽譜資料の内容が明らかになるとともに、ご子孫のご協力により自宅に残されていた蔵書から眞篠の留学当時を知る手がかりを得ることができた。「オルガン履修に出された課題」「オルガン演奏の記録」では、成績関係資料、『東京芸術大学百年史』の演奏会編から得られたリストに対して、「東京音楽学校で受入れた楽譜」の中から該当曲目の特定を図り、その時使用可能だった楽器の情報と合わせて、演奏実態を考察した。

明治期には、東京音楽学校の前身である音楽取調掛においてオルガン演奏は唱歌教育の一部であったが、東京音楽学校の外国人教師ディットリヒによって専門的なオルガン曲へのアプローチが始められた。

1899（明治32）年のMason & Hamlin社製ペダル付二段鍵盤のリード・オルガンの導入により東京音楽学校ではペダル演奏が可能になり、主に島崎によって演奏されるようになった。また、ノエル・ペリーNoël Péri（1865-1922）によってフランスのメソッドが取り入れられ、手鍵盤用の演奏レパートリーがオリジナルのハルモニウム用の曲へとシフトし始めた。1904（明治37）年にはRodolphe Fils & Debain製のハルモニウムの受入れによって、より専門的な演奏が可能になった。

大正期には、島崎の留学の影響が東京音楽学校のオルガン演奏に現れ始め、Mason & Hamlin社製ペダル付リード・オルガンをを用いた演奏が、中田章、眞篠俊雄を中心に盛んに行われた。一方で、手鍵盤のレパートリーの拡充が進み、ハルモニウムおよびリード・オルガンの演奏技術とレパートリーは、大正期にかなり充実したものとなった。

昭和期には、1928（昭和3）年に、アボット&スミス製のパイプ・オルガンが寄贈されたことで、オルガン演奏の中心は次第にペダルを伴う演奏となり、眞篠が留学で習得した技術が直接的に教授されていた。

バッハのオルガン曲を中心とするパイプ・オルガンのレパートリーの演奏は明治期からすでに試みられていたが、ペダル付で演奏する機会は限られていた。一方で、手鍵盤による演奏が一つのジャンルとして探求され、大正期までかなりのレパートリーが構築された。二つの潮流は互いに関係しながら、昭和期のパイプ・オルガンを中心とする演奏の礎となった。

本研究では東京藝術大学に現存する資料を中心に扱ったが、東京音楽学校時代のオルガン資料は意外に多く残っていた。また、中田章や眞篠俊雄の関連資料のような新たな手掛かりも示された。それらの更なる資料研究のほか演奏実践の研究を進めることによって、より演奏実態に迫ることが可能になるだろう。また今後、教会の活動とともにあったオルガン演奏など、日本のオルガン演奏の変遷上重要な事象を扱っていく際にも、本研究が一助となることを願う。

（総合審査結果の要旨）

「東京音楽学校におけるオルガン演奏の変遷～近代日本におけるオルガン専門教育の成立過程を中心に～」の題目で執筆された千田寧子の論文ならびに演奏についての所見を記す。

東京藝術大学は、音楽取調掛（1879-1887）、東京音楽学校（1887-1949）、東京芸術大学（1949-）と変遷したが、上野校地は地震・戦争被災を免れたため、学内に明治時代からの会計資料、教務関連資料、楽譜、楽器等が残されている。千田は、本学オルガン専攻学生としてオルガン科の起源と歴史に興味を持ち、これら膨大な資料を丹念に調査・整理して、東京藝大ひいては近代日本におけるオルガン演奏の歴史に迫ろうと試みた。近代日本のオルガン演奏・教育に関する資料の網羅的研究は、これが初めてである。

図書館に残されている東京音楽学校時代からの楽譜と楽譜受け入れに関する3種類の帳簿、東京音楽学校が保有していた楽器と楽器購入に関する会計資料等をそれぞれ調査・照合し、また教務関連資料から「オルガン履修生と教師」「オルガンの課題」の変遷を調査して、明治・大正・昭和初期のオルガン教育の様子を明らかにした。音楽取調掛時代の鍵盤教育は足踏みリード・オルガンによる唱歌伴奏だったが、東京音楽学校設立当初から本格的なパイプ・オルガン作品の楽譜が多数購入され、パイプ・オルガンが学内にない時代にも、ルドルフ・ディットリヒ（塙・1861-1919）そしてノエル・ペリー（仏・1865-1922）ら外国人教師によって足鍵盤を手鍵盤で演奏できるような工夫をして（リード・オルガン2台での「連奏」など）専門的な教育がされていた。レパートリーもドイツ、フランスと、その時々教師の特色が現れていた。1899年に購入されたMason & Hamlin社製ペダル付きリード・オルガン（2018年修復・通称リスト・オルガン）や、1928年に寄贈されたAbbot & Smith社製パイプ・オルガン（旧奏楽堂に現存）の導入とともに、パイプ・オルガンの教授・演奏が一気に専門的になったことも、裏付けられた。「公的演奏の記録」の調査によって各時代に教員・学生によって演奏されていた作品の実態が明らかにされた。ここで学びのちに教員となった島崎赤太郎（1874-1933）、中田章（1886-1931）、眞篠俊雄（1893-1978）らがそれぞれの時代にオルガン教育・演奏を展開していった様子が浮き彫りにされた。また、オルガン科研究室に保管さ

れている通称「眞篠文庫」（眞篠俊雄が残した大量の楽譜群）や、ご遺族の所蔵されていた彼らの留学時代の楽譜や演奏会プログラムの徹底調査を行った結果、楽譜にある書き込み等から当時のオルガン演奏の実態が一部解明された。これらの資料は19世紀末～20世紀初頭ドイツオルガン界の歴史的資料としても非常に貴重なものである。

東京音楽学校時代の膨大な調査資料は巻末に大部の表として付され、後の研究のために提供されている。

本研究が、先例のない研究として多大な成果をあげている一方、調査・整理によって得られた膨大な情報を報告説明することに気を取られ、これらを基に東京音楽学校におけるオルガン演奏実践の「実態」を真に探るまでに至っていないことが惜しまれる。また、参照情報出典の記述不足や東京音楽学校内の区分（専修部、師範部、本科、豫科、師範科甲乙種、選科等）の説明等が不十分な点やミスタイプ等の指摘が相次いだ。とはいえ、整理提示された情報はこれまで一般に全く提示されてこなかったものであり、今後の研究の基礎となる本研究の成果が果たす大きな意義を根本的に損なうものではない。

学位審査会における演奏では、Mason & Hamlin社製ペダルつきリード・オルガンでJ.S. バッハのパスサリア、足踏みリード・オルガンを2台並べて行う「連奏」でメンデルスゾーンのオルガン・ソナタ第2番、リード・オルガン独奏でカルク・エラートのソナタ、ガルニエ大オルガンでラインベルガーのソナタ第4番とフランクのコーラル第3番が演奏された。東京音楽学校各時代の楽器・演奏形態を実践する形で研究を演奏と結びつけ、オルガン科の現在に繋がる研究成果を披露する場となった。ただ単に当時演奏された楽器で当時のレパートリーを演奏してみるという実験的なレベルを遥かに超え、表現力豊かで説得力のある演奏となった。論文・演奏の双方を秀の評価とし、博士の学位にふさわしいと判断する。